

焦れもしたが、愉しくもあつた。嫌だと繰り返す癖に、帝人の息は荒くなり、びくびくと身体が反応する。すでに果てたはずの性器が再び形を取り戻していた。徐々に変化を遂げる身体を見れば、帝人の身体は確実にその行為を悦楽として受け止めていることがうかがい知れる。

やがて三本もの指を銜え込んだ頃には、彼の特に弱い部分も発見していた。その部分を指で突いてやれば、そのたびに過剰な反応を示す。ここを静雄自身で思い切り突いてやれば、どんな風に乱れるだろうか。考えるだけでも堪らない。

「……っ」

指を抜こうとすると、まるで強請るかのように、きゅう、と指が締め付けられた。その反応に帝人自身が驚愕し、違う、とまた言葉を紡ぐ。

初めての癖に、誘い込むような仕草。極上にしか思えない、その身体。

もどかしい気分に陥りつつ、指を引き抜き、その狭い入り口に自身をあてがった。

「嫌です、駄目です、……やっ、やめて、やめろ……っ！」
最後は懇願ではなく、命令形なのが妙に可笑しい。

「——や、……ひっ、やだ、無理、い……っ」

「無理じゃ、ねえ、だろ」

指に比べれば確かに太いだろうが、大丈夫だろう、という確信があつた。本能でそう知っていた。彼は自分を受け入れられる。受け入れなければならない。

狭いそこは、指で感じるよりも熱く思えた。帝人も同じなのか、熱い、と呻くように訴える。

「そう、だな」

ひどく熱く、そして狭く、苦しいほどなのに心地良い。狭いの言葉よりもよほど素直に彼の身体は静雄を受け入れる。目が眩むほどの悦楽に酔った。

「や、動か、な……っ」

動かないで、と懇願したいのだろう。そう理解はできた。けれど領けるはずがない。それでも、ほんの少しだけの慈悲が芽生え、束の間だけ彼の言葉に従つてやる。

「動くぞ」

そうして告げた言葉は宣告だ。

「まだ……っ、や、……待って、待ってください、——っ」

「待てねえ」

自分は待った。束の間だが、それでも確かに待った。彼の願いを叶えてやった。ならば、今度は自分の番だ。自分が思うがまま彼を貪り、手に入れ、汚すべき番だった。

「ひ、……っ、や、ああっ、やあ、んっ、あ、……や、だ、……ひあっ、あああんっ」

望むがまま、激しく突き上げる。拒むように狭い癖に、それでいてすべてを受け入れるようでもあつた。堪らない。本当に、堪らない身体だった。

「や、激し、……もっと、ゆっく、り……っ」

「後で、な」

「そ、んな……っ、や、そこ、やだ、……やああっ！」